

研修 テーマ	児童が道徳的価値について多面的・多角的に考える授業を目指して ー テーマ発問と問い返しの工夫を通して ー
-----------	---

授業実践Ⅱ 第4学年道徳科学習指導案

指導月日 令和元年11月1日

所属校名 塩竈市立第二小学校

氏名 大槻 征玄

- 1 主題名 社会のきまりを考えて (C 規則の尊重)
- 2 教材名 「雨のバスでいりゅう所で」(東京書籍 新しいどうとく4)

3 主題について

(1) ねらいとする道徳的価値について

本主題は、新学習指導要領第3学年及び第4学年の指導内容項目Cの「規則の尊重」に位置付けられ、「約束や社会のきまりの意義を理解し、それらを守ること」をねらいとしている。このねらいは、第1学年及び第2学年の指導内容項目Cの「約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にすること」を受け、第5学年及び第6学年の指導内容項目Cの「法やきまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他の権利を大切にし、義務を果たすこと」に発展していくものである。

社会のきまりの持つ意義について考えることを通して、社会のきまりが、個人や集団が安全にかつ安心して生活できるようにするためにあることを理解し、それらを進んで守ろうとする態度を育てていくことは、豊かな人生を送る上でとても重要なものである。

この時期の児童には、気の合う仲間や集団の中にきまりをつくり、自分たちの仲間や集団及び自分たちで決めたことを大切にしようとする傾向がある。また、一人一人が身近な生活の中で、社会のきまりと公共物や公共の場所との関わりについて考えることは多くはない。

そのため、社会のきまりの意義やそれに関わる公共の場所、利用者の思いについて考えることを通して、それらを守ろうとする心情を育てていくことは大切であると考え。また、一人一人が相手や周りの人の立場に立ってよりよい人間関係を築くことや、社会集団の向上のために守らなければならない社会のきまりがあることについて十分考えさせていきたい。

- (2) 児童について (男18名 女20名 計38名)
- 児童の実態を把握し、本時の指導に生かすために、次の調査を7月に自由記述式で実施した。

表1 きまりを守ることができた経験			表2 きまりを守ることができなかった経験		
【設問1】きまりを守ることができたときって、どのようなときですか？			【設問2】きまりを守ることができなかったときって、どのようなときですか？		
No	児童の回答	人数 (%)	No	児童の回答	人数 (%)
1	時間を守れたとき	15人 (39%)	1	廊下を走ってしまったとき	10人 (26%)
2	友達と遊ぶとき	8人 (21%)	2	時計を見ないで時間に遅れたとき	9人 (24%)
3	毎日の宿題提出ができたとき	5人 (13%)	3	友達との遊ぶ約束を忘れたとき	7人 (18%)
4	座ってチャイムを開けたとき	4人 (11%)	4	切り替えができなかったとき	6人 (16%)
5	そうじがきちんとできたとき	3人 (8%)	5	しっかり話を聞けなかったとき	4人 (11%)
6	給食の片付けのとき	3人 (8%)	6	次の勉強の準備をしていなかったとき	2人 (5%)
表3 きまりを守ることができなかった理由			表4 きまりの存在意義		
【設問3】きまりを守ることができなかったのは、どうしてですか？			【設問4】きまりはどうしてあるのですか？		
No	児童の回答	人数 (%)	No	児童の回答	人数 (%)
1	夢中になっていたから	29人 (76%)	1	安全に過ごすため	16人 (42%)
2	疲れていたから	6人 (16%)	2	争いやけんかにならないため	10人 (26%)
3	他の人もしていたから	3人 (8%)	3	犯罪が起きないようにするため	5人 (13%)
			4	楽しく過ごすため	4人 (11%)
			5	きまりがないと自由すぎてしまい大変になるから	2人 (5%)
			6	命を守るため	1人 (3%)

設問1では、「時間を守れたとき」が39%、「友達と遊ぶとき」は21%、「毎日の宿題提出ができたとき」が13%であった。さらに、設問2では、「廊下を走ってしまったとき」が26%、「時計を見ないで時間に遅れたとき」は24%、「友達との遊ぶ約束を忘れたとき」が18%であった。設問1及び2から、児童にとってのきまりは、学校生活のきまりと結び付けて考えているものであることがうかがえる。

設問3では、「夢中になっていたから」が76%であった。きまりは大切であるという意識はあるものの、何かに夢中になるときまりを守れないことがあるという実態から、きまりは絶対に守らないといけなものという強い意識はないことが推測される。また、「夢中になる」という児童が多い実態から、周りの状況を見て行動できていないことがうかがえる。

設問4では、「安全に過ごすため」が42%、「争いやけんかにならないため」が26%であった。きまりとは、争いやけんかなく、安全に過ごすためのものと捉えていることが分かる。ここでも、学校の中におけるきまりに児童の意識が向いていることがうかがえる。

以上のことから、学校の中におけるきまりの意義や大切さについて大方理解はしているが、きまりは学校だけではなく、公共の場所においても社会のきまりがあることに意識が及んでいない実態が見えてきた。そのため、公共の場所における社会のきまりの意義や大切さについて考えることを通して、それらを守ろうとする心情を育むことが必要であると考ええる。

(3) 教材について

本教材は、軒下で順番に並んでいる人がいたにも関わらず、一番先頭にバスに乗り込もうとしたよし子が母親に引き留められ、その後バスの中でいつもと全く違う厳しい様子の母親を見て、自分の行動を振り返るという話である。この教材を活用して、社会のきまりの意義について考え、進んでそれらを守ろうとすることの大切さに気付かせることができると考えられる。

本教材に内在する本価値の内容項目は規則の尊重であり、具体的には社会のきまりである。本教材において、社会のきまりが内在している場面の一つとして、母がよし子の肩を強い力で引いた行為がある。この行為に焦点を当てることで、よし子の社会のきまりの捉えが浮き彫りになるとともに、母の行為の背景にある思いや願いから社会のきまりを捉えることもできる。よし子がバスの中で自分の行動を振り返る場面も本価値が内在しているところではある。しかし、夢中になってしまうことできまりを守れなくなる児童の実態と教材の中において、バスが来て飛び出したよし子とが重なるため、この場面に焦点を当てて考えていきたい。その上で、きまりがなぜ必要なのかを考えることを通して社会のきまりの意義を認識し、周囲の人々への配慮や思いやりを持って集団や社会のことを考え、きまりを守ろうとする心情を育んでいきたいと考える。

4 本時の指導

(1) ねらい

社会のきまりの意義を理解し、進んできまりを守ろうとする心情を育てる。

(2) 指導に当たって

導入では、「きまりは何のためにあるのだろう」と問うことで、きまりについてのこれまでの経験を想起させ、価値への方向付けを図る。

展開前段では、児童に、「よし子がバスに乗ろうとしたのはどうしてだろう」と問うことで、「誰も停留所に並んでいない」や「濡れたくない」等の人間理解につながる考えを引き出していく。その後、児童に、「どうして母は、よし子の肩を強い力で引いたのだろう」と問い、母の行為の背景にある思いや願いについて考えさせることを通して、「嫌な思いをする人の存在」に気付かせていきたい。その中において、友達の考えに触れる中で自分の考えを吟味させたり、問い返しをしたりし、本価値を多面的・多角的に考えられるようにする。

展開後段では、「きまりは何のためにあるのだろう」というテーマ発問をし、社会のきまりの意義について考えさせることを通して、本価値を見つめさせる。その後、全体で児童の考えを聴く中で、考えをつないだり問い返ししたりし、社会のきまりの意義について、児童が納得解を得ることができるようになるようにする。

終末では、ねらいとする道徳的価値について考えたことを、振り返りの5つのポイント（分かっ

たこと・よかった友達の考え・自分の考えの変化・もっと考えたいこと・これからの生活に役立てたいこと)を基に、道徳ノートに振り返らせることで、自己を見つめさせ、本価値を主体的に自覚させていきたい。

5 研修テーマとの関連

(1) 研修テーマ

児童が道徳的価値について多面的・多角的に考える授業を目指して
ー テーマ発問の設定と問い返し of 工夫を通して ー

(2) 研修課題との関連

I 期の実践の課題を踏まえ、次の手立てを講じて実践を行うこととした。

① 児童が道徳的価値について多面的・多角的に考えるためのテーマ発問の設定

導入と展開後段において、「きまりは何のためにあるのだろう」というテーマ発問を考えさせることを通して、社会のきまりの意義を捉えさせていく。導入では児童のきまりの意識を全体で共有して本価値への方向付けを行い、展開後段では教材で考えたことを基に、再度、社会のきまりの捉えを構築させる。

② 児童が道徳的価値について多面的・多角的に考えるための問い返しの工夫

展開前段ではAとBの問い返しを中心に展開していく(図1)。その後、よし子と母どちらの立場の考えも出たところで、Eの問い返しをする。その際、社会のきまりの意義について新たな気付きがありそうな場合はEの問い返し中心に進めていく。その中で、バス停に並んでいる人に関わる発言があったときには、「バスの停留所には並んでいないが、雨宿りしながら並んでいる人の心情」に焦点を当てて児童の考えをつなぎ、本価値における考えを深めていくようにする。

しかし、あまり新しい気付きが出ない様子であれば、CやDの問い返しに切り替えることで、考えを広げていく。なお、I期の課題でもある「振り返りの時間不足」については、課題解決するため、しっかりタイムマネジメントし、授業後半の時間確保に努めていく。

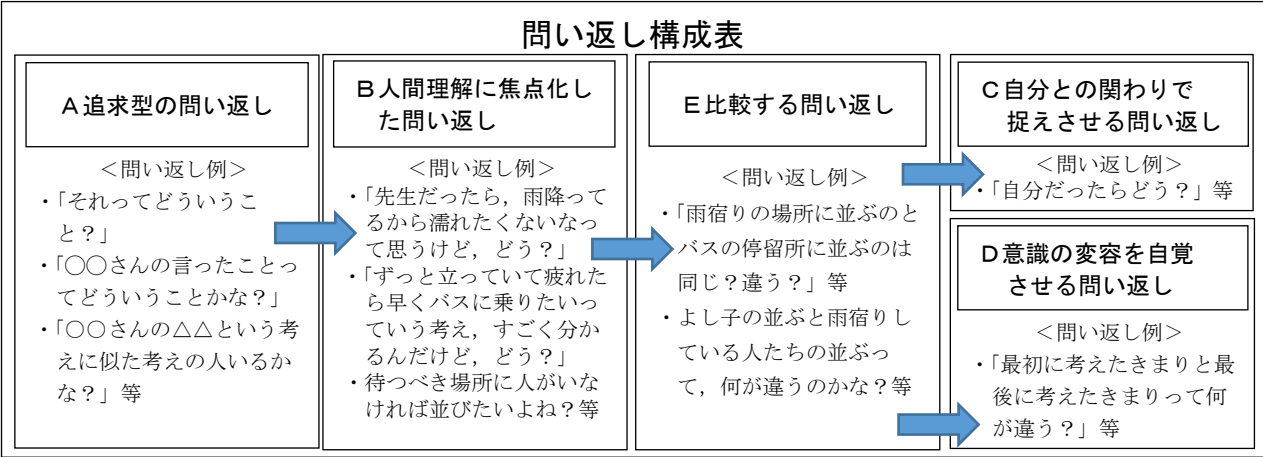


図1 II期における問い返し構成表

③ 板書の構造化の工夫

I 期において、教材の概要を含め、構造的な板書にすることで、異なる立場や状況に立つ登場人物の考えを比較検討しやすくなったという成果があった。結果として、考えるべき論点が明確になり、問い返しをしっかりと受け止めて考える児童が多く見受けられた。そのため、II期では「板書の構造化」を新たな手立てとして設定する。なお、板書の構造化に関しては、「できるだけ多くの児童が見て

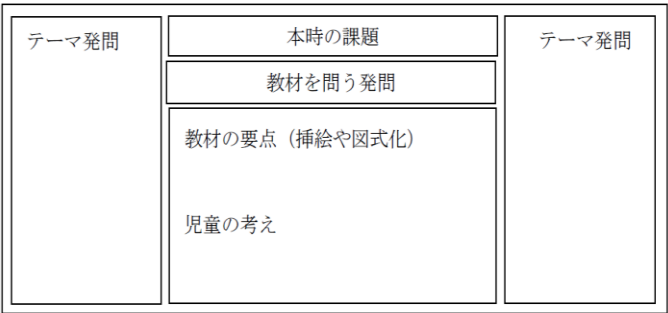


図2 構造化した板書構想

分かりやすく、考えやすい」というユニバーサルデザインの理念を重視する。

板書の中央上段に「本時の課題」、中段に「教材を問う発問」、下段に「教材の要点（挿絵と図式化）」及び「児童の考え」、板書左右に「テーマ発問」とする（図2）。

6 学習過程

(1) 本時のねらい

社会のきまりの意義を理解し、進んできまりを守ろうとする心情を育てる。

(2) 指導過程（別ページ参照）

(3) 評価

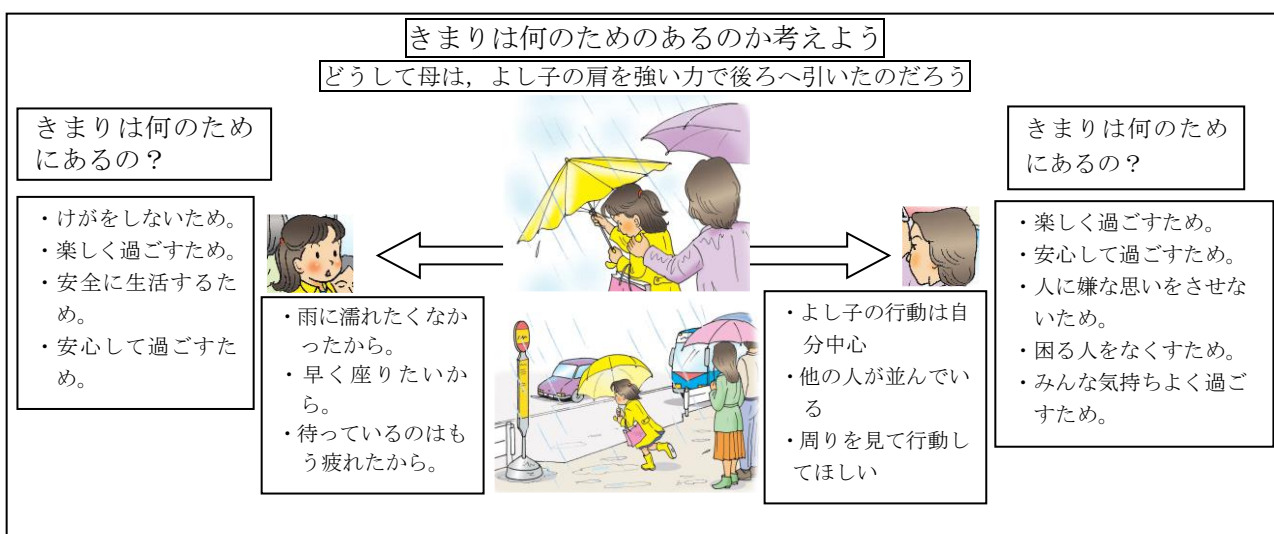
社会のきまりの意義を理解し、自分との関わりで考えている。

(4) 準備物

教師：掲示物（紙板書、挿絵）

児童：教科書、道徳ノート

(5) 板書計画



(2) 指導過程

段階 時間	学習活動	主な発問や児童の反応	指導上の留意点（・）と評価（※）
導入 つかむ （7分）	1 ねらいとする価値についての捉えを話し合う。	テーマ発問 きまりは何のためにあるのだろう。 ・楽しく過ごすため。 ・安心して過ごすため。 ・争いやけんかなく過ごすため。	・「きまりは何のためにあるのか」について考えることを通して、導入における児童のルールやマナー等を包括した「きまり」の意識を全体で共有する。その上で、本時では公共の場所における「きまり」について考えていくことを確認する。なお、「社会のきまり」という言葉は、児童にとってイメージしにくいので、具体例を示しながら「みんなが使う場所」という程度の押さえに留める。
きまりは何のためにあるのか考えよう			
展開前段 深める （18分）	2 「雨のバスでいりゆう所で」を読んで、価値について話し合う。	・よし子の気持ち分かるなあ。 ・お母さんなぜ肩を引いたの？ ・雨宿りしている人たちに気付かなかったんだなあ。 よし子がバスに乗ろうとしたのはどうしてですか。 ・雨に濡れなくなかったから。 ・早く座りたいから。 ・待っているのはもう疲れたから。 ・みんなバス停に並んでなくて雨宿りしていたから。	・どのようなきまりなのかを考えながら読むことを確認する。 ・教材文の感想を聞いたり、概要を確認したりしながら内容の要点をしっかりと捉えさせる。
展開後段 見詰める （10分）	3 社会のきまりについての価値観を交流し、価値を主体的に探る。	どうして母は、よし子の肩を強い力で引いたのだろう。 ・よし子の行動は良くないことだと気付いてほしかった。 ・他の人が並んでいることに気付かせたかった。 ・雨に濡れたくないのはみんな一緒。周りを見て行動してほしかった。	<問い返し構成表> A 追求型の問い返し ・「それってどういうこと？」 ・「〇〇さんの言ったことってどういうことかな？」 ・「〇〇さんの△△という考えに似た考えの人もいるかな？」等 B 人間理解に焦点化した問い返し ・「先生だったら、雨降ってるから濡れたくないなって思うけど、どう？」 ・「ずっと立っていて疲れたら早くバスに乗りたいていう考えすごく分かるんだけど、どう？」等 C 自分との関わりで捉えさせる問い返し ・「自分だったらどう？」 D 意識の変容を自覚させる問い返し ・「最初に考えたきまりと最後に考えたきまりって何が違う？」等 E 比較する問い返し ・「雨宿りの場所に並ぶのとバスの停留所に並ぶのは同じ？違う？」等
	4 社会のきまりの意義について考えることを通して、本価値を見詰める。	テーマ発問 きまりは何のためにあるのだろう。 ・楽しく過ごすため。 ・安心して過ごすため。 ・人に嫌な思いをさせないため。 ・困る人をなくすため。 ・みんな気持ちよく過ごすため。	・道徳ノートに、本時で考えたことを基に、自分の考えを書かせる。その後、全体で考えを共有し、問い返しをする中で本価値に迫っていくようにする。 ・考えを共有する中で、「並んでいる人」に関連する発言があったときには、似た考えの児童に説明を促すことで、考えを広げるようにする。その中で、並んでいる人が、よし子の行動によりどのような気持ちになるかを考えさせることで、社会のきまりを守ることの意義や大切さに気付かせる。 ※きまりの意義を理解し、自分との関わりで考えているか。（発言、道徳ノート）
終末 振り返る （10分）	5 社会のきまりを大切にしようとする心情を育む。	本時を振り返り、きまりについて考えたことを道徳ノートにまとめよう。 ・きまりを守ることがどうして大切かが分かりました。 ・これからはきまりを守って、周りの人と良い気持ちで過ごしていきたいと思いました。	・本時で考えてきたことを視点（分かったこと・よかった友達の考え・自分の考えの変化・もっと考えたいこと・これからの生活に役立てたいこと）に沿って振り返り、自己内対話を促す。また、振り返りを交流させることで、価値の自覚を促す。 ・振り返りの中で共有する児童の考えは、「価値理解の考え」や「他者の考えから学んだ多面的・多角的な考え」、「自己を見つめた考え」、「今後の生活に生かす考え」を基に、机間支援しながら見取り、意図的に指名していく。

(6) 教材分析図

〔主要場面〕

〔よし子と母の心〕

〔主な発問や指示〕

〔発問の意図〕

〔価値〕

